

KCELS

Newsletter No.25
MARCH 2010

第34回神戸女学院大学英文学会 (KCELS) 大会報告

英文学科長 **山田 由美子**

英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の推進を目的として設立された神戸女学院大学英文学会 (KCELS) は、今年で第34回を迎え、例年通り11月の最終金曜日に午後2時からL-28教室で開催された。特別講演と院生・院修了生の研究発表という2部構成で、今回は、米文学研究セクションが学会準備を担当した。

特別講演には本学元教授で城西国際大学客員教授、元奈良女子大学教授の風呂本惇子先生をお迎えした。先生は、黒人文学・カリブ系文学を専門とされ、多数のご著書、研究論文、小説の翻訳を手掛けられている世界的なアメリカ文学者である。本大会では、「踊り継ぐ人々—カリブ(系)文学への一つのアプローチ」というタイトルで、ご講演を拝聴した。カリブおよびカリブ系コミュニティにおける祝宴の場での西アフリカ渡来の踊りの伝統を、文字を奪われた奴隷たちの伝承文学の代替物として捉え、奴隷制度や植民地政策に対する集団としての結束力や個人の抵抗力を育む伝承文化として再評価する様々な小説をご紹介いただいた。カリブの踊りの伝承を、一般になじみの薄い文化人類学や社会学の研究書ではなく、小説という媒体を用いることにより、全世界が共有できる財産として伝承していく可能性をご提示いただいた点で、大層意義深いお話であった。

研究発表では、本学博士前期課程を修了し、現名古屋大学大学院博士後期課程の田中淳子さんが、「Relation between Collocations Knowledge and an Ability to Infer Unknown Words —Comparing Advanced Level and Intermediate Level ESL Learners—」、また本学博士後期課程の吉村エリさんが「シェイクスピア喜劇と志賀直哉——『暗夜行路』を中心に」と題する研究発表を行った。いずれも将来性をう

かがわせる内容であり、本学会の今後の発展への期待のうちに大会は終了した。

踊り継ぐ人々—カリブ(系)文学への一つのアプローチ

城西国際大学大学院
人文科学研究科客員教授 **風呂本 惇子**

語り継ぐ、歌い継ぐという表現はあるが、踊り継ぐという言い方はあまり聞かない。しかし、踊りにも民話や民謡と同じく、メッセージも、人々の生活や歴史の痕跡も刻み込まれている。カーニバルの踊りで有名なカリブ海地域の人々にとって、踊りはどのような意味をもつのか。文学ではそれをどのように写し取っているのだろうか。まず、いくつかのカリブ文学作品の例からアプローチを始めてみよう。

アール・ラブレイスの『ドラゴンは踊れない』(1979)、エドウィージ・ダンティカの『骨の貸貸』(1998)、シモーヌ・シュワルツバートの『果ての橋』(1972)、マリーズ・コンデの『風の巻く丘』(1995)、エドウィージ・ダンティカのエッセイ『アフター・ザ・ダンス』(2002)において、踊りは苦しい現実にもともに向き合っている生きる力を失わないために必要不可欠なものとして、悲惨な体験を訴えるすべもなく沈黙していた者に与えられる自己表現の場として、西洋合理主義とは相入れない西アフリカ経由のコスモロジーを伝えるものとして、カリブ海における人種や民族を越える文化の混交(いわゆるクレオリゼーション)の例として、「大きな存在のなかのちっぽけな片鱗、集団ひょういの一部」になる体験として描かれ、それぞれに「踊る喜び」が語られている。

次に、このような断片的なアプローチから一歩進め、カリブ系アメリカ女性作家ポール・マーシャルの作品に焦点を絞り、踊りそのものがその作品世界の構築にいかにか機能しているかを確かめてゆきたい。バルバドスからの移民二世であるマーシャルは、作品の舞台をほとんど実在または架空のカリブの島にするほど、カリブとの絆を強く意識する作家である。デビュー作『ブラウンガール、ブラウンストーンズ』(1959)は珍

しく舞台がアメリカだが、描く対象はニューヨーク、ブルックリンのバルバドス出身者が集まるバジャン・コミュニティの人々である。バジャン・コミュニティの特色は、勤勉と節約をモットーにアメリカ社会に着実に根付いていくことである。主人公セリーナ・ボイスの母シラは、このモットーに忠実に家政婦や軍需工場労働者として必死に働くが、父デイトンはそうした価値観に背を向け、生活を楽しもうとする。セリーナは子供のときはそのような父を愛し、母の厳しさに反発するが、やがて大学生としてコミュニティの外の世界を知るにつれ、バジャンたちの生き方を理解してゆく。踊りの場面は小説前半のクライマックスを成す。心の底では愛し合う夫婦の絆が決定的に断ち切られるさまが、アメーバのようなコミュニティの人々の踊りの動きで表現される。一つに結束した踊りの輪は、母シラと姉イナとセリーナを取り囲み、デイトンを異物のように閉め出すのである。次いで短編「バルバドス」(1961)の踊りの場面にも注目しておくべきだろう。金持ちの老人と彼に雇われた貧しい若い娘の主従関係がくつがえるその話には、当時カリブ海に浸透していた脱植民地化運動の雰囲気重ねられているが、若い娘が内面化していた無力な自己像をかなぐり捨て、自分もつ力を自覚できたのは、カーニバルの日の踊りがきっかけなのである。

デビュー作で描かれた踊りが生む結束力、次の短編で強調された踊りが個人に与える影響力、この二つを組み合わせるのが次の長編『選ばれた場所、時を越えた人々』(1969)である。フィラデルフィアの某リサーチセンターによる開発プロジェクトの対象に「選ばれた場所」は、カリブ海のボーン・アイランドの中でも最も貧しい地域ボーン・ヒルズである。そこへ調査にやってきた社会学者サウルとその妻ハリエット、彼らを最初だけ滞在させる下宿の女主人マールを中心に、植民地の制度が公的に終わっても以前と変わらぬ生活を強いられる「時を越えた人々」の状況が語られる。ボーン・ヒルズの人々がカーニバルの度にくりかえす数世紀前の奴隷反乱のページェントに伴う踊りが見せる結束力、これに参加したのを機に自己を変革したサウルとマールは友愛を深めてゆくが、溶け込めずに脱落したハリエットは負の方向に自らを追いやる結果になる。三つ目の長編『ある讃歌』(1983)にも、「時を越えた人々」の結束した踊りが登場する。主人公エイヴィー・ジョンソンが子供の頃に出会ったサウスカロライナ・テイタム島の老人たちがキリスト教会の中で行うリング・シャウト。自ら老境に入った彼女がカリブ海クルーズの途中で出会ったキャリアコ島の老

人たちが先祖をなだめる儀式で見せるすり足の踊り。この二つの驚異的な類似に、西アフリカ渡来の歴史が刻まれていることを感じたエイヴィーは、今後の人生の指標を得てアメリカへ帰る。自ら踊りに参加することで彼女も再生の機をつかんだのである。踊りはマーシャルの作品世界の屋台骨の如き機能を果たしていると言えよう。

発表要旨

Relation between Collocations Knowledge and an Ability to Infer Unknown Words —Comparing Advanced Level and Intermediate Level ESL Learners—

田中 淳子

名古屋大学大学院博士後期課程

ある現象を表現するとき、複数の表現の仕方が存在する。しかし、その中でも慣習的に使われるパターンがあり、それがコロケーションである。Stubbs(2001)は、コロケーションについて、「連続するテキスト内において、互いに数語の範囲 (span) 内に共起する傾向を持つ 2 語ないしそれ以上の語の語彙的關係」だと述べている。第二言語学習者におけるコロケーションの役割については、多くの研究がなされており、Moon(1998)やHalliday(1976)、Stubbs(2001)らによって言語習得におけるコロケーションの重要性が指摘されている。Moon(1998:58)は、共起表現を正しく使いこなす理解できることは、第二言語話者達の英語能力を示すもの“a sign of their proficiency”になると述べている。コロケーションは、英語学習者の英語力向上にも重要な役割を果たしていると考えられる。Kadota(1982)によると、学習者の英語読解における処理単位は、語単位を超え、句を中心とする。これらの先行研究より、学習者は、句を個々の単語 (word-by-word) で構成されたものと捉えるのではなく、チャンクとして捉えた方が、効率的に学べる可能性がある。さらに、英語母語話者は、自分が普段使用している句の知識によって、無意識の内に、話者が次に言う単語を予測していると考えられることから、コロケーション習得により、語と語の結びつきを知ることが、単語予測能力の向上につながるのではないかと考える。

近年、技術の進化により、コンピュータでの膨大なデータ編纂が可能となり、言語習得研究の分野に

において、コーパスが注目を集めている。コーパスとは、コンピュータによる検索可能な大量の言語データである。

本研究では、BNC (British National Corpus) を使用し、コロケーションの抽出を行い、英語学習者達のコロケーションの知識量と単語予測能力の関係を検証した。また、その関係を上級英語学習者と中級英語学習者において比較を行い、考察を行った。

発表要旨

シェイクスピア喜劇と志賀直哉『暗夜行路』を中心に

吉村 エリ

神戸女学院大学大学院博士後期課程

本発表では、シェイクスピア喜劇『真夏の夜の夢』『から騒ぎ』を用いて、志賀直哉の作品解釈を試みた。

志賀直哉とシェイクスピアに関する先行研究については、『ハムレット』を介して父と子の対立という観点から『クローディアスの日記』を比較考察したものが大半を占めている。志賀の作品をシェイクスピア喜劇の影響の観点から捉えた研究は、蓮實重彦が「廃棄される偶数『暗夜行路』を読む」の中で『暗夜行路』の主人公時任謙作と『真夏の夜の夢』の世界に汎濫している「二」という偶数原理に関連付けて論じている以外はこれまで皆無とっていい状況にある。

そこで本発表ではまず、『クローディアスの日記』に描出されている悲劇に対する志賀の見解について考察した上で、日記や断片から彼の喜劇への共感を指摘した。

次に『暗夜行路』について反一悲劇と述べる大嶋浩の見解からもう一步踏み込んで、『暗夜行路』のプロットに『真夏の夜の夢』『から騒ぎ』が反映されている可能性について検討した。『真夏の夜の夢』において、ハーミア、ライサンダーが、問題解決を求めてアテネの森へ迷い込み、アテネの森に入ったことによって、ライサンダー、ディミートリアスの恋愛対象がハーミアからヘレナに移るといった視覚の変化が『暗夜行路』にも見られることなどを中心に、『から騒ぎ』が示唆を与えた可能性についても見ていった。そして、最後に両作品における結婚までの過程の類似性についても検証した。

以上のことからシェイクスピア喜劇は、志賀直哉の創作活動に示唆を与えていたことが明らかになった。また『ハムレット』を中心にシェイクスピア悲劇に関心が寄せられていた明治期から大正にかけて、志賀がシェイクスピア喜劇を評価していたという事実は特筆すべきことであろう。

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年度から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、学生の応募を募っている。本年度は、全体で20名の応募があり、2月に英米文学、英語学、翻訳・通訳、グローバル・コミュニケーションの各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『英文学科卒業論文・プロジェクト論集』（2010年度春刊行予定）に掲載する。

英米文学（応募者数 4名）

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E06116 司馬裕子

言語学（応募者数 2名）

<最優秀賞>

E05002 天野亜理紗

<優秀賞>

E06003 江崎早苗

グローバル・コミュニケーション（応募者数 12名）

<最優秀賞>

E06043 鍵中千明

<優秀賞>

E05152 八木瑠璃子

翻訳・通訳（応募者数 2名）

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E05015 福田知美

E06040 出雲智子

キャンパスニュース

<退任>

原田園子教授
長尾ひろみ教授

* Ryan D. Klint 専任講師は、本年3月末に4年の任期を終えられ、アメリカに帰国されます。

<2010年4月より就任>

* 出口真紀子めぐみ教育基金客員教授は、本年3月末に1年間の任期を終えられ、本年4月からは任期3年の准教授として就任されます。

* Fukushima Marcelo氏が、専任講師として本年4月に就任されます。

* 松尾歩氏が、准教授として本年4月に就任されます。

* 中村昌弘氏が、専任講師として長尾ひろみ教授の後任で本年4月に就任されます。

* Nathaniel Carney氏が、Klint専任講師後任の専任講師として本年4月に就任されます。

* Shawn Banasick氏が、准教授として本年4月に就任されます。

* 白井由美子氏が、専任講師として本年4月に就任されます。

国際学会発表

* 別府恵子氏

フランス、The American University of Paris で開催されたThe First International Conference of the European Society of the Jamesian Studies (2009年4月3-5日)にて研究発表。

* 東森勲氏

オーストラリア、Macquarie University で開催されたCross-Culturally Speaking, Speaking Cross-Culturally Conference (2009年7月6日)にて研究発表。

アメリカ、Pitzer Collegeにて開催された2009 Linguistic Association of Canada and the United State Conference (2009年8月6日)にて研究発表。

* 保坂華子氏

ハワイ (ホノルル) で開催されたThe 8th Annual Hawaii International Conference on Education (2010年1月7-10日)にて研究発表。

* 石川有香氏

英国、リバプール大学で開催されたCorpus Linguistics Conference (2009年7月20-23日)にて研究発表。

ギリシャ、Peloponnese大学で開催されたICT in Analysis, Teaching and Learning of Languages

Workshop 2009 (2009年9月10-11日)にて研究発表。

香港、香港理工大学で開催されたHong Kong Association for Applied Linguistics (2009年12月12日)にて研究発表。

* 栗栖和孝氏

ソウル、Yonsei Universityで行われたSeoul International Conference on Linguistic Interfaces (6月24-26日)にて招待講演。

名古屋、名古屋大学で行われたThe 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics (9月4-6日)にて研究発表。

* 奥本京子氏

カンボジア、平和紛争学センターで開催された、国際トランセンド・ネットワーク国際会議 (2009年5月4日-8日)にて研究発表。

韓国、Duksung Women's Universityで開催された、The 3rd International NGOs Conference on History and Peace (2009年8月19日-22日)にて、研究発表。

台湾、National Dong Hwa Universityで開催された APPRA (Asia-Pacific Peace Research Association)国際会議 (2009年9月9日-12日)にて研究発表。

* 鞆野ひろ子氏

米国 Philadelphia の Sheraton Society Hills で開催されたSociety for the Study of American Women Writers Fourth International Conference (2009年10月21日-24日)にて、パネルの司会および全体会議での研究発表。

* 吉田純子氏

ドイツ、フランクフルトのGoethe 大学で開催されたInternational Research Society for Children's Literatureの第19回国際会議 (2009年8月8日-12日)にて研究発表。

大学院生による学会発表

* 吉村エリ氏

大阪大学で開催されたテキスト研究学会第9回大会 (2009年8月28日)にて研究発表。

神戸女学院大学で開催された文芸学研究会第39回研究発表会 (2009年9月19日)にて研究発表。

神戸女学院大学で開催された第34回神戸女学院大学英文学会 (KCELS 2009年11月27日)にて研究発表。

和洋女子大学で開催された日本ジョージ・エリオット協会第13回全国大会 (2009年11月28日)にて研究発表。

*大喜多香枝氏

京都外国語大学で開催されたアメリカ文学会関西支部例会（2009年7月11日）にて研究発表。

大阪府立国際児童文学館で開催された日本イギリス児童文学会第39回研究大会（2009年11月14-15日）にて研究発表。

記念賞

2009年度、以下の学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

佐々城きく(女32C36)記念賞 E07176 吉本万穂子

デフォレスト記念賞 E07092 仲野知恵里

丹部トモ(C41)記念賞 GE0833 徳嶺 友香

会員による出版紹介

◇橋本登代子氏 『ジェイン・オースティンの生涯』（キャロル・シールズ著、他16名共訳、内田能嗣監訳、世界思想社、2009年5月刊）

『英語・英米文学のフォームとエッセンス』（共著、佐野哲郎教授喜寿記念論文集刊行委員会編、大阪教育図書株式会社、2009年3月刊）

◇石川有香氏 『慣用連語とコロケーション：コーパス・辞書・言語教育への応用』（A.P.カウイー編、共訳、くろしお出版、2009年4月刊）

Academic Reading for Science and Engineering（他8名共著、Cengage Learning、2009年4月刊）

◇Kurtis McDonald氏 “Fostering independent language learning with Wikipedia.” (*M. Carroll, D. Castillo, L. Cooker, & K. Irie, 編, 共著, Independent Learning Association 2007 Japan Conference: Exploring theory, enhancing practice: Autonomy across the disciplines.* Chiba, Japan: Kanda University of International Studies.)

“Logical use of logic puzzles.” (M. S. Andrade 編、共著、*Language Games: Innovative Activities for Teaching English.* Alexandria, VA: TESOL Publications, 2009:8頁)

◇奥本京子氏 『平和学を学ぶ人のために』（君島東彦編、共著、世界思想社2009年7月20日刊）
Dramatherapy and Social Theatre: Necessary Dialogues (Sue Jennings 編、共著、Routledge,

2009刊)

◇山田由美子氏 『原初バブルと《メサイア》伝説——ヘンデルと幻の黄金時代』（世界思想社2009年7月刊）

神戸女学院大学英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)

(2005年 9月22日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英文学会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

- I. 大会での発表について
 - (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCELS運営委員会で審査の上、決定する。
- II. 維持費・参加費について
 - (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
 - (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
 - (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
 - (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。



編集後記

会員消息・出版物のご連絡、ありがとうございました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々の研究の発展をお祈り致します。

*KCELS Newsletter*編集委員

(2009年度運営委員)

○鶴野ひろ子 ○山田由美子 ○吉田純子 (ABC順)

KCELS Newsletter No. 25

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2010年3月発行